

たがいに おもいやり ささえあう さぼーとひろば

TOSS

トス
2015 SPRING
VOL.6

非配偶者間体外受精 精子提供 卵子提供

2014年の7月末の受精着床学会で根津院長の
「夫の実父からの提供精子による非配偶者間体外受精 110組の妊娠率 86.4%について」発表以降、
大変ご相談のお問い合わせが多くなり、
2015年3月現在非配偶者間体外受精治療の一回目の面談が半年待ちという現状になっております。
また、実際の治療にお入りいただけるのは、そこから更に半年の面談期間を経てということで、
今回の TOSS は、当院としての非配偶者間体外受精治療の取り組みにあたってのスタンスを
改めて根津院長からお伝えし、その過程を経て治療に入られた患者さんの思いと、
相談室スタッフからのメッセージでまとめてみました。
皆さんからのご意見感想をぜひお寄せ下さい。

二〇一五年の念頭に当たって

「非配偶者間体外受精治療を始めようとしている皆さんへ」

院長 根津 八紘



1. 特殊生殖医療とは

初回号でも述べさせて置いてありますが大切な文言なので再度記します。

国としての方針も無く、日本産婦人科医学会（旧日母）や日本産科婦人科学会（日産婦）が禁止したり、取り扱いが定まらない状況下にある生殖医療分野の技術に関し、日の前の患者さんの為に、施行している以下のもので、多胎妊娠例に対する減胎手術・配偶子（精子や卵子）の無い方への配偶子の提供（AIDは施行しない）・代理出産（現在休止中）・着床前診断・卵子セルフバンクなどを、当院独自に特殊生殖医療と呼称しています。

日本の国は自由主義国家であり、公序良俗に反しない限り、自己責任の下で行ったり選択したりする権利を、国民一人一人が持っていることは憲法によって保障されていることであります。特殊生殖医療全般は決して公序良

俗に反するものではありません。当事者のプライバシーを厳格に守りながら全てを公開しつつ、当院独自のガイドライン下で行っていることであります。

このような現状を充分御承知置き下さり、生まれて来る子ども達の為にどうか自信を持ち、前向きに治療をお受けになって下さることをお願いいたします。

2. 面談に半年から1年という長時間をかける意義

当施設は開設38年を迎え、産科・婦人科・小児科病院として「子づくり、子育てプラザ」を目標に掲げ、地域や社会のお役に立てるようにやって参りました。妊娠され出産された子どもさん方が、どのように育てられ、どのような人生を歩んで行かれるかという、長いスパンで考えながら、親御さんになられる方や親御さん方に関わらせて

頂いております。

そのような基本理念の元に存在している施設ですので、特殊生殖医療下でお子さんをもうけたいとの一念で来院された皆さんであっても「妊娠させてあげればそれでよし」という考えは持つておりません。最初に面談スケジュールをご覧になられた皆さんは、まず「何故こんなに時間をかけてやるんだらう？」と思われたことと思えます。それについて具体的に説明致します。

①後ろめたいことをするのではない

普通に妊娠し出産される方々とは異なり、皆さんはその立場に立ってみなければ理解出来ないような少数派の皆さんです。その皆さんが、学会では反対したり、うやむやな状態にしているような治療を受け、子どもを妊娠、そして出産し、その子を育てて行く中で、もしかしたら後ろめたい思いに駆られたり、その事実を知った周り

の人達から白い目で見られたりするかも知れません。その時、皆さん方が、少しでも心が揺れたり、後悔したりするようなことがあるようであるならば、子どもに与える影響は計り知れないものがあると考えます。決して安易な気持ちでお子さんを儲けようとしたわけではないという、強い信念を最終お持ちの上で治療に対していただきましたと思います。

②夫婦としてのスタンスの再確認

特殊生殖医療に向かうに当たり、夫婦のどちらかに原因が有る場合が多いのですが、決してその責任を咎め合うようなことをなさらないこと。

何故ならば、「二人の人生を身の尽きるまで共に」と誓い合って、二人は二人の人生のスタートを切ったはずです。今回のことがどちらかに原因があつてのこととしても、長い人生の中で、二人が今回と逆な立場に立たされることはいくらでもあると思います。その都度、相手を咎め合うようなことがあるとすれば、誓い合ったスタートの言葉は一体何だったのでしょうか。二人の人生において例え何があるうとも、二人で補い合い助け合いながら人生を全うするのが夫婦であります。即ち、もう一度スタートラインに立

ち戻って、今回のことを再度お考え頂きたいと思います。もしお互いの間に少しでも引け目や上下関係が有るようならば、そのようなスタンスの下、例えば子どもを儲けたとしても、子育ては失敗に終わることは間違い無いと考えます。

③夫婦二人だけの人生では無い

人生は二人だけで存在し得るものではありません。何か事が起きた時、家族や友人、そして協力して下さる人々の存在を決して忘れてはなりません。今回の事に臨むに当り、関わって下さる方々への感謝を忘れずに、そしてその気持ちを将来における子どもへの告知の際にも忘れること無く伝えて頂けたらと思います。

以上のようなことを考え、御夫婦や家族のコミュニケーションを十分に積み重ね、どのようなことが起きようとも、子ども達の為に全力を投入、守り切るという覚悟を持ち、治療に臨まれることが必要と考えます。その為には、治療に入る前の段階で十分な時間が必要です。なお、面談開始以前、開始以降でも当院のこのようなスタンスがご理解いただけないと判断された場合には、審議会を経て面談をお断りさせていただきます。あらかじめ

御承知置きください。

3. 子どもへの告知について

私は特殊生殖医療、中でも扶助生殖医療をするに当り、何時でも子どもには告知するつもりで治療に入るべきであると考えています。何故ならば、「何ら恥ずかしいことや悪いことをしよう」と考え、そしてしたわけではない」ということです。であるならば、告知をすべきであると親が考えた際には、親として襟を正して子どもさんと対し、以下のことを堂々と話すべきです。

①自分達は生殖障害者で、その為に普通の形では子どもを作ることができなかったこと

②自分達を率先して助けて下さる方(配偶子や子宮の提供をして下さる方)がおられたこと

③自分達は心からあなたの誕生を願っていたこと

④自分達の為にあなたを授けて下さった神様に感謝しながら、これまで一所懸命あなたを育てて来たこと、そして、その思いはこれからも何ら変わらないこと

以上について真摯に語り伝えるべきです。それに偽りが無ければ、子どもさんは必ずや理解してくれるものと、

私は確信しています。

4. 誰の為に何を成すのか

最近、学術会議叢書19「生殖補助医療と法」財団法人日本学術協力財団編集・発行による284頁に亘る本を読む機会を得ました。錚々たる方達がそれなりの分野で御意見を述べておられますが、学問的内容のみで一体誰の為に何を成さんとしておられるかが伝わって来ませんでした。と言うのは、特殊生殖医療を受けなければならぬ方々の立場に立つて考えようとしておられる方が、誰一人としておられなかったからです。それよりも、その医療によって引き起こされて来るであろう問題点のみを掘り下げ、中でも法律

家の方々、現有する法の下でしか捉えようとせず、そのような立場の方達を助けてあげるためにはどのような法律が必要であるかというような前向きな意見を述べておられる方が一人もおられなかったことには正に驚愕の一言でありました。「困っている人の為に、自分達は何を考え何をすべきか」と尽力することが、健常者の弱者に対する関わり方の基本であり「人間としての心であり愛ではないか」と私は考えます。

私のやって来た特殊生殖医療が様々な理由から「否」とされる方がおられるのであるならば、そのような立場に置かれてしまう方達の為に、代わりにしてあげること考えたり、慰めたりしてあげようと、何故しようとしないのでしようか。「まさか、諦めを最初から強制なさるつもりではないでしょうね」と問いたくなってしまう。

特殊生殖医療における皆さんの苦難の経歴と、藁にも縋る思いで当院においでになられているご夫婦のお話しを聞くにつけ、面談中にもかかわらず熱いものがこみ上げてしまうことがよくあります。それと同時に、私のような者でも目の前の困っている患者さんのお役に立てるといふ喜びを味わわせて頂けて、この治療を続けることができた、という感謝の気持ちにも溢れます。

今後も院長である根津の気力が続く限り、吉川副院長始めスタッフの協力が得られる限り、少数派の皆さんのお役に立てるべく頑張らせて頂くつもりであります。皆さんの願いが叶いますように、スタッフ一同一丸と成って、精一杯お力になりたいと思っております。

非配偶者間体外受精(精子提供)



	精子	卵子	出産	子の遺伝子
SMC 配偶者間体外受精				夫婦の遺伝子
非配偶者間体外受精	SMC 卵子提供			夫の遺伝子のみ
	SMC 精子提供			妻の遺伝子のみ
	受精卵提供			夫婦の遺伝子を受継がない

精子提供のケース

〇〇さん(妻)

院長先生との面談の時、今までどうい
う思いでここにたどり着いたかなど私
たちの内面を話し終えてしばらくする
と、驚くことに院長先生がすすり泣き
を始めたのです。院長先生はこれまで
おそらく何千、何万の患者さんと話し
てきたに違い有りません。なのに、たっ
た今会ったばかりの私たち二人のため
に涙をしてくださったのです。

私たちの現在に至るまでの道のり
は、けっして平坦なものではありません
でした。

藁にもすがる想いでお電話したあの
日から約1年、この時間は私たち夫婦
にとって、必要な大切な時間だったと
感じております。

第1回目の面談時、渡辺さんから、
「もう一度やり直しになります」と言
われました。この面談を迎える前にす
べきことが私たち夫婦には出来ておら
ず、面談を受ける以前の問題でした。
どうしよう、初回からこんな状態に
なってしまつて…と、不安な思いが込
み上げましたが、正直ほつとした、そ

んな感情でもありました。それは何故
かと言うと…。

夫は、家庭の事情により義父とは学
生時以来会っていない状況でした。今
回の件を義父にお願いする際、夫は義
父に数年ぶりに会うことになったので
す。私も同席したいと伝えましたが、
まずは2人で、と夫に言われそれ以降
も会う機会はもうけられませんでした。
数年ぶりに会う義父が、一体どの
ような状況で、更にこの件をどう思い
何と言われるか分からない状況の中、
私のことを思って故の夫の判断とは思
いません。ただ、私は正直、義父に会っ
てみたい、会わずに面談を迎えるなん
と、もやもやと一人葛藤しております
でした。そのため、初回面談時に渡辺さ
んから、「まずはお父さんに会ってか
ら。お父さんときちんと絆を深めてき
て下さい」と言われたことが、あやっ
ぱりその通りだ、この心に引がかっ
ていた気持ちは間違いではなかったの
だと、すんと胸に落ち、それと同時
に、張り詰めていた私の不安な気持ち
が一気に解け涙が溢れ出しました。その
時、この病院は、他では踏み込まない
であろう、私たち患者の心の声に耳を
傾け本音を汲み取ろうとしてくれると
気づきました。

第2面談まで約5カ月間、義父と何度か話す機会を作り少しずつではありましたが、家族関係と絆が作れてきたと感じてきました。会う度に、義父のことはもちろん、夫の子どもの頃の話も伺うことが出来ましたし、そんな話を嬉しそうに話して下さる義父に、私は素直に嬉しく思いました。夫自身も、今まで知らなかった(記憶になかった)思い出話や義父との会話に嬉しさを感じているようでしたし、今まで途中で途絶えてしまった親子の関係と距離が確実に縮まっているように思います。そんな二人を見てみると、いくら離れていて時間は経っていても、お互いを心配し思い合う、やっぱり親子は親子なんだなあと感じました。この事が何よりも嬉しかったです。きっと、夫が無精子症でなかったら、義父に会うこともなかったでしょうし、こうして親子が再会することもなかったと思います。本来はとても辛い無精子症ですが、そのお陰で今回こうしてお互いを引き合わせてくれたこと、これは感謝すべきことだと思っております。

緊張で迎えた1回目のやり直し面談。不安で押し潰されそうな状態でした。そんな私たちに渡辺さんが、「お久しぶり。ここまで来るのは勇気が

要ったでしょう、よく帰ってきてくれたね、お帰りなさい。」そのお言葉を聞いた途端涙が止まりませんでした。これまでの義父との時間はきちんと伝える事もでき、面談は無事終わったはずでしたが、その後のやり取りの中で私達は常識に欠けた行動をおこしてしまい、次回の面談の予定は随分先となっていました。その時は傷心よりも、ああどうしよう、もう終わりだ、と、気持ちばかりが焦り何も考えられない状況でした。けれどもまた、そこから約半年間は、家族とは何か、新しい命を授かるとは何かを、じっくり考える時間になりました。

そんな諸々を経て迎えた第2面談。院長先生との出会いも、私たち夫婦にとってかけがえのないものでありました。本を拝見し、院長先生のこの治療における相当なる想いが心に響き、お会い出来る日を心待ちにしていた同時に、緊張や不安も勿論ありました。しかし、お会いすると、まさに院長先生は、私たちが本を読み「聖人」と感じていたそのお方そのものでいらっしゃいました。当日、診察室に入り、院長先生との面談が始まりました。先生は静かに「人生、いろいろありますよね」と話し始めました。その声の温かさに

緊張もほぐれ、今までどういう思いでここにたどり着いたか、今までの苦しみ、など自然と院長先生に私たちの内面を話すことができました。私たちが話し終えてしばらくすると、驚くことに院長先生がすすり泣きを始めたのです。院長先生はこれまでおそらく何千、何万の患者さんと話してきたに違いありません。なのに、たった今会ったばかりの私たち二人のために涙をしてくださった。そんなお医者さん、人と出会ったことは初めてです。院長先生はこの治療の大切さについてもお話下さり、「あなた方であればきっと親になってもいいですよ」と温かなエールを送って下さっているように感じました。

現在、無事3次面談を終え義父からの精子の採取も済み今後は実際の治療

に進む予定です。この先どうなるかはまだ分かりませんが、この諏訪マタニティークリニックに出会い繋がりを持てましたこと、心から感謝しております。誠に、ありがとうございます。

これから面談を受ける方、ぜひ心の内を全部お話をさして下さい。この病院の皆さんは、真剣に向き合っています。だからこそ厳しいお言葉も頂きますが、全ては私たちのためのものだったと痛感してきました。くじけそうになる事もあると思いますが、そんな時こそ、正直に真正面からぶつかるのも良いのではと思います。

こんな私たちの経験談が、少しでもお役に立てれば幸いです。文章を書かせて頂きました。(2015.3現在治療中)



1さん(妻)

二人にとって「平等に血縁のない」子ども。でも、私たちは、その分「平等に愛せる」のではないかと、養子縁組が他の選択肢より二人の未来の光となりキラキラと輝き始めたように感じた

無精子症発覚から手術への道のり

結婚してから2年が経つというころ、なかなか子どもが授からないことから、思い切って市内の産婦人科を受診しました。フーナーテストをおこなった時初めて、医師から「精子が見つかりません。」と告げられたのです。翌週夫の精液を病院へ持ち込み、検査結果を待ちました。診察室へ呼ばれたとき、その場の空気感から全てを悟りました。ああ、いなかっただ、と。精子が1匹もないこと、死がいくらもないため精子が作られていないと思われること、総合的に考えると無精子症であると診断されること。紹介状を頂いて、市内の総合病院の泌尿器科へかかりました。血液検査からホルモンの値が異常値であることがわかりました。「この値からすると、先天的なも

のだと思われま。顕微鏡下でおこなうMD-TESEをすることで最終的な結論は出せるので県外の病院を紹介できますが、ただ、切るまでもないと言われるかもしれない、それくらい価値です。」しかし、家に戻って医師の言葉を反芻するうちに、やはり「いいないことを確かめるだけ」の手術にはしたくない気持ちが強まり、無精子症で検査すれば必ず名前の挙がる遙か遠い地にある病院へ問い合わせをしました。

7カ月の待機の末、ようやく迎えた手術当日。想像を超える緊張と不安に耐え、夫の手術は無事に終了しました。「目で確認できる範囲に、精子細胞はいませんでした。精細管の中にはさまざまな細胞があって、採取した細胞の中には、精子細胞と思われるものもあつたのですが、しつかり検査しないと判定できません。その結果は4週間後に病院に問い合わせをしてください。」1カ月後、病院へメールで問合せそのすぐ翌日回答がきて、精子細胞がいなかったことが書かれていました。私たち二人の子どもを授かれる道が完全に閉ざされた日でした。

諏訪マタニティークリニックとの

出会い

それでもやはり、子どもを抱きたいと願う気持ちが残るのです。諏訪マタニティークリニックのことは、以前からインターネット等を通じて知っていましたが。非配偶者間体外受精のことも、聞いたことがありました。しかし、夫の両親は離婚しており、音信不通の実父からの精子提供は望めません。しかし夫には弟がいることから、弟からの提供はどうだろうかと思つたので、諏訪マタニティークリニックに問い合わせをしました。少しでも血縁を残せる道があるなら、夫の親族からの精子提供を受けたい、と思つたのです。

メールの問い合わせのすぐ翌日、カウンセラーの渡辺さんから朝一番で夫の携帯に電話が入りました。その電話は、弟への提供依頼についての内容でした。兄弟からの提供については例が無いわけではないものの、円満に進んでいくことがなかなか難しいケースが多いので、今一度慎重に考えてみてほしい、ということでした。そこで、はたと気づいたので。私たちは、自分たちとその未来のことしか見ていなかったのでは、ということ。弟の奥さんの気持ち、甥っ子や姪っ子たちの気持ち、今後の私たち夫婦とのかかわり方について…子どもを授かるに当たってその周りで起こり得る問題を度

外視して、視野が極端に狭くなつたことに気づかされました。しかし同時に、さらなる絶望感も襲ってきました。子どもを望むことが自分たちの力で叶えられない以上、その希望は単なるわがままになってしまう。それどころか、弟夫婦の関係を壊してしまいかねない可能性もはらみ、私たちには「子どもが欲しい」という普通の感情さえ許されないのか…。しかし、渡辺さんはその後のメールで「お二人で抱え続けた苦しさをここへ持ってきてください。一緒に考えましょう。」というメールをくださったのです。その文章を読んだ瞬間に涙が溢れてきました。今まで二人でしか話せなかったこの苦しみを、渡辺さんは「持ってきて」と言うのです。まるで、両手を広げて、私たちを受け入れるかのような言葉に、泣くことを禁じていたことを忘れて嗚咽をもらして泣きました。

3つ目の選択肢「養子縁組」

カウンセリングの当日。「養子縁組についてはどう思っていますか？」と質問されました。その方法がある、ということを知っていても、二人の血縁を重視していたこともあって、治療中の選択肢には入っておらず、情報を探求することもしてこなかったことを正

直に打ち明けました。すると渡辺さんは笑顔のままこう続けました。「養子についてだけは何の情報も入っていないということですね。血縁にこだわってきたあなた方に、血のつながりについて何だろうと考えてもらえる機会になるよう、お話しさせていただけようと思います」と、養子縁組の流れ、里親になる為に考えなければならぬことと必要な覚悟、そしてこれまで諏訪マタニティークリニックで養子縁組をされた方々のお話や写真などを見せてくださりながら、時間をかけてじっくり説明してくださいました。

私たちの頭に浮かんでいた2つの選択肢、非配偶者間体外受精とAID。これらの方法だと、血縁を残せる道がある。私たちはそこに拘っていません。「血縁を重視していれば、親子間での悲しい事件は起こらない？出産する経験も大事だろうけど、10カ月間お腹の中にいることがすべて？生まれてからがスタートであって、『子ども』が『親』にしてくれる。妊娠することが親になる条件ではないんです」

渡辺さんは、私たちが今まで囚われてきた「普通のこと、当然のこと」に對して、どんどん意見を出していくのです。普通ってなに？当たり前ってなに？私たちが固執していた考え方と

は別の角度からアプローチをかけてくれたことで、私たちの見えていた未来に広がりがありました。さらに「偶然にもこのタイミングで来週、年に1回の里親BBQ交流会があるから参加してみませんか？」とお誘いを頂きました。突然の話でしたが、しかしこれも何かの縁なのかもしれないと思います、その場で参加を決めたのです。

BBQまでの1週間、私たちは今までにないくらいに今後のことについて話をしました。子どもについて話すとき、お互いに遠慮や気遣いが働き、言葉を選びながらの会話は、言いたいことの半分も言い合えずに消化不良になることがほとんどでした。しかし、この1週間は全く違い、二人の将来について上がっている3つの選択肢の1つ1つを、あらゆる角度から見つめ直し、きちんと向き合って話し合うことができました。血縁を残すことは、お互いの親の気持ちを考えれば最善な方法であることも理解しています。でも、弟夫婦に大きな負担やストレスを与えることは望みません。AIDでは、私の血縁は残せませんが夫の気持ちを置き去りにしての強行はできません。この養子縁組が他の選択肢より二人の未来の光となりキラキラと輝き始めたように感じました。

二人にとって「平等に血縁のない」子ども。でも、私たちは、その分「平等に愛せる」のではないか。

そして迎えたBBQの日。

多くのご家族が集まる中で、私たちはこれから養子縁組を検討する夫婦としてみなさんに紹介していただきました。主催者のお一人に「ここには何のタブーもありません。子どもたちも告知をされていますし、誰に何をきいてもらっても構いませんから！」と言われました。そう言われても、やはり養子縁組に至った道のりに関しては質問する言葉を選んでしまい、なかなか会話が進められずにいました。そんな私の様子を知ってか知らずか、2組のご家族の奥様たちが、ご自身の辿られた養子縁組について話し始めてくれました。「あの時の講習会に長野県から3組くらい参加してたんだよね？」そうそう！『長野組』とか言われたよね。その口調は、少し昔を懐かしむような響きで、少しも暗さを伴っていませんでした。どのご家族もみんな「よくある家族」でした。普通にお父さんとお母さんと子どもたち。「お母さん！これ取って！」と駄々をこねる子ども、おぼつかない足取りの赤ちゃんが支えを求めて伸ばす手とそ

の手に取るお父さん。本当に、普通の家族の風景がそこにありました。また、何故か不思議なほどお顔がよく似ている親子ばかり。養子となったお子さんたち、そして里親を選択するに至った皆さん方には様々な事情や背景がある、ということについてある程度レクチャーをうけた上で参加したBBQ。そこで私たちが目の当たりにした幸せそうな「家族」、色々なことを乗り越えた「家族」の笑顔はとても眩しく感じました。

帰路についた私たちは車中ずっと感想をしゃべり続けていました。初めて二人が、同じ道を真正面から見据えて前向きに進んでいる気がしました。

初めてメールを出したとき渡辺さんは「全てのことに必ず意味があり、その意味に気づいたとき人は自分を生きていくことができる」とお返事をくれました。悩んだこと、辛くて悲しかったこと、そして諏訪マタニティークリニックへつなげたこと、新たな人生の選択肢として養子縁組にスポットライトが当てられたこと。これまでのすべての意味が、今とそしてこれからにあるのかもしれない、二人でそう納得しています。私たちはキラキラ輝く新しい未来へ一歩を踏みだそうと思っています。(2015.3現在)



精子提供のケース

Tさん(妻)

不安に負けそうになる時や下を向いてしまう事が起きるかもしれません。でも、全ての事に意味があると思つて今出来る事を全力で後悔しないで済むような人生を歩んでいきたいと思つていきます。

主人が無精子症とわかった時、頭が真っ白になった事を今でもはつきりと覚えています。今から8年程前の事です。その後主人は、手術を受けたものの精子が見つかる事はありませんでした。病院でもこのような状態ではどう

することも出来ませんとの説明を受けました。

それから私たち夫婦の間では、どちらともなく子どもの話をする事を避けるようになり、私も主人も子どもの話題を口にしないまま何年も時間だけが過ぎて行きました。休日、家族連れを多く目にするデパートやスーパーへは極力行かない、テレビでも赤ちゃんの出るような番組が始まれば見ない、子どもの居る夫婦をどれだけうらやましいと思つても、ペットも飼つてるし夫婦二人で生きていたつてこんなに幸せ、子どもができない夫婦は可哀想、と思われたくなくてそれを必死で前面に出す様に生きてきました。夫婦の間でもその話題は封印され、いつの間

か子どもに関して本心を言い合えない「仮面夫婦」として暮らしていました。諏訪マタニティークリニックでの治療のことは義父から聞きました。義父が「自分が協力するから不妊治療を頑張ってみないか?」と言つてきました。半信半疑のまま諏訪マタニティークリニックに問い合わせをして、初回面談の場に私は「いつもの私」で座りました。

これまでの気持ちについて問われ、話し終えた所で渡辺さんに「あなたが本当にこのころの底から子どもが欲しいと思つているように私にはまるで感じられません。」とハッキリと言われてしまいました。その瞬間、私のガチガチに固めていた心の堤防が一気に崩壊し、主人の結果が出たあの時から6年分の本当の自分の気持ちを叫ぶ様に、泣きながら話し出しました。話している自分が自分にとっても驚きました。そして気づきました。私はどれだけ子どもが欲しかったか。そんな私を最初から最後まで、渡辺さんは全て受け止めて下さいました。

ようやく言葉に出来たあの日から私は希望を持てるようになりました。そして私自身あの日を境に変わったようなのです。数ヵ月後に行われた主人の両親との面談で、義父が渡辺さんに「元

の明るい嫁に戻してくれてありがとうございます」と言つていた事を聞きました。まさか義父がそんな風に思つてくれていたとは思つてもいませんでしたし、聞いた時は驚きと共に感謝の気持ちがかみ上げました。希望を持つて夫婦で未来を想像し、話し、笑い合う、という事が出来るようになったことや、主人と改めて向き合いたくさんの話が出来た事、全ての面談を終えた時の二人の変化はまさしく面談の過程で起こっていききました。

そして、去年からいよいよ体外受精による治療が始まりました。4回目の移植で初めての妊娠判定を頂きました。しかし、残念ながら流産という結果になってしまいました。言葉では言い表わせない程に辛い経験でした。それでも時間だけはどんどん過ぎていき少しずつ泣かずに過ごせる日が多くなつていきました。

そんなある日の事でした。仕事に同僚が妊娠中である事を知りました。しかも予定日は私が当初出産予定日かな?と思つていた頃とほぼ同時期でした。この時、仕事にも関わらず号泣してしまいました。まだちっとも立ち直つてはいませんでした。おめでどうも言えませんでした。おめでどうも言えなかった自分がとても嫌でした。私

はチャンスを与えてもらって、数年前には妊娠すると言う事自体、夢にも思ってもいなかった事なのに、それなのに人の幸せにおめでとの言葉が掛けられない…。自分の心の狭さにまた落ち込みました。

それから少し時間がたち、過ぎていく時間に焦ったり不安になったりもしました。でも、少しずつではあるもののまた前を向いて進めるようになったと感じるようになりました。そして今、時間のある時にしている事があります。それは、引越すと同時に飼いはじめた犬を通じて知り合った方と交流する事です。年齢も居住地もバラバラですが、犬好きな者同士とても話が合いますし、犬と暮らす者として勉強になる事もたくさんあります。

その中のひとりの方と先日、じっくりとお話する機会がありました。その方に子どもはいません。しかし以前、不妊治療をしていて流産の経験もあるとお話してくれました。そしてその方がおっしゃった言葉がとても印象的で忘れられません。

『子どもを持てる可能性がまだあるのなら諦めないで今頑張って!』と。流産後、また妊娠できるかな…、また流産したらどうしよう…と、不安に思っていた私の背中を押してくれる言葉で

した。この方と出会えたのは、我が家の愛犬のおかげです。つくづく思っている事があります。もし、私たちに結婚後すぐに子どもが出来ていたら恐らく犬は飼わなかったと思うし、犬を通じて知り合う人もいなかったと思います。

結婚した頃に想像していた未来とは違っているものの、だからこそ出会えた我が家の愛犬やそれが縁で知り合えた方々。今となつては、愛犬はかけがいのない家族ですし、一緒に人生を歩んでいけて幸せだと思っています。

思い描いていた人生とは違っても私は全ての事に意味があると思つています。私の人生、これからのようになつていくかはわかりません。また人と比べてしまう事もあるかもしれませんが、不安に負けそうになる時もあるかもしれませんが、下を向いてしまう事が起きるかもしれません。でも、今出来る事を全力でいつか後悔しないで済むような人生を歩んでいきたいと思つています。今の人生だからたくさんの人に支えてもらっている事に気づけたり、感謝する気持ちを持てたのだと思えます。いつの日か支えてくれる方々にいい報告が出来るようにこれからも上を向いて笑顔で過ごしていきたいと思つています。(2015・3 現在治療中)



精子提供のケース

Sさん(妻)

あのときの私たちではダメだったんです。すんなりいかなかったことが夫婦や家族の絆や信頼となり、今の私たちになれたんだと思います。

あれは第2面談日のこと、看護師さんと培養士さんからの治療説明が一通り終わり、最後に渡辺さんから「何か不安や心配になっていることはありますか?」との問いかけに急に涙が溢れてきてしまいました。何故そんなふうになってしまったのかというと、私たちはこの治療を希望して問い合わせをしたものの、第2面談の段に至っても互いの顔色を探つての上辺の話しか

いしか出来ていませんでした。主人の仕事の都合上、月に何日か一緒に居られないために会話をする時間もままならなかったのもありますが、私自身主人の無精子症という事実を芯から受け止め切れておらず直視することを避けていたため、あの日治療についての現実的な話をお聞きし、「本当にこんな治療をしてもいいのか」と怖くなってしまったのだと思います。当然、その後に予定されていた院長先生と副院長先生の面談は中止となりました。しつかり二人で話をして本当に決心がついたらまた連絡をしてくださいと言われ病院を後にしました。車に乗ってすぐに、「ああ、なんてことをしてしまっただらう」とうろたえてしまいました。帰りに渡辺さんから「奥さんが本音を言えるあなたになってください」と言われた主人は、その言葉がとても響いたようで、その時点から何か考え入っていました。

そこから先は1日もこの治療と子どもについて考えない日はありませんでした。主人も同じだったと思います。第2面談後の主人は積極的に私に「何か不安とかな?」と聞いてくれたり、この治療のことや子どものことについてとてもよく話すようになりました。次第に私も遠慮などすることなく話せ

るようになり、治療のことだけでなくお互い色々な話をしっかり話せるようになりました。もちろん時々強い口調になって喧嘩もしたり、泣きながら言い合いになったこともありました。しかしそんな中で、課題としていただいた先生方の書籍や患者さんたちの体験談を読んだことは私たち夫婦にとつては大変学ぶことが多くそして心の支えにもなりました。

仕切り直し面談までの4カ月、夫婦の絆や信頼がより深くなり、お互いを思い合えるようになったと思えます。そして変わった二人の様子を渡辺さんにお伝えし、あらためての面談日を設定していただきました。4カ月ぶりの諏訪マタニティークリニック、とても緊張しました。あれだけたくさん話をして、強い覚悟と決心を持って臨んだつもりでしたが、緊張の方が勝つてしまい先生方を前にして頭が真っ白になり、質問されたことに二人して答えることが出来ず「もう一度、ご夫婦できちんと考えて来て下さい」と言われてしまいました。すっかり意気消沈し相談室に寄って今後のことを話しました。この4カ月は一体なんだったのか?!と落胆しきった私に車に乗った時に主人はこう言いました。「もしこれでダメでも、諏訪マタニティーク

リニックでの経験はとても貴重だった。この経験がなければ、自分はここまで変われなかった。俺は無精子症になって良かったのかも」。私は驚きました。1年前は無精子症という現実を目の当たりにし人生に絶望してしまふほどつらい思いをしたのに、無精子症になって良かった」と、ここまですべて前向きに考えられるほどの主人に変わっていたのです。ここでまず、4カ月の時間は主人にとつてはこんな大きな気づきになっていたことを思い知りました。

しかし、気持ちはあつても一生懸命が逆に空回りになってしまい、面談行程は足踏み状態。先に進めなくなつた私達は再度相談室へ行き渡辺さんと三人で話をする事になりました。そこで気持ちや考えを的確に伝えることの難しさを学びとても反省しました。問い合わせから1年、3回で済むはずの面談は5回になってしまいました。が、やっと最終面談日を迎えるところまでこぎつけられました。

当日、起きた瞬間から緊張していました。義両親を迎えに行き、私たち二人で「よろしくお願ひします」と言いました。義父、義母からは優しい笑顔で「こちらこそよろしく」と言ってもらいました。諏訪マタニティークリ

ニックに着き相談室に通され、渡辺さんは義両親と私たちにかつて「お二人がこの最終面談の日を迎えられたのが本当に嬉しい！よくここまでくじけずに頑張りましたね」と涙を浮かべ私たちの手を握ってくれました。その言葉に、嬉しさと感謝の気持ちとこれまでのことが一気に思い出され、私も涙がこぼれました。

院長先生の面談はやはり緊張しましたが、「医療とは患者のためにある」というお話をしてくださり、私たちがそのような患者のつらさや気持ちを思い、涙ぐんでお話しをしてくださいました。院長先生は何度も患者さんのために、患者さんのためにとおっしゃっていました。逆に私は、難しい治療でありながら、私たち患者のためにこの治療をしてくださる先生に、感謝の気持ちを抱きながらお話を聞いていました。そして、命の尊さ、親になるということ、子どもを幸せにする責任を改めて感じました。お話の最後に院長先生から、今回は義父からの精子が2回分あつたことを教えていただきました。それを聞いた瞬間、義両親は無事に精子があつたことにとても安堵した様子でした。この治療は、家族の誰一人として気持ちが欠けてしまつては成り立ちません。今まで何度も家族で話

をすることはありましたが、この最終面談の日に四人が一緒になって先生方のお話を聞くことが出来、改めて気持ちの共有がしっかり出来たのではないかと思います。そして院長先生から「人ずつ今の気持ちを聞かれた時、主人は「一生懸命働いて、治療費を稼いで、治療がうまくいくように頑張ります。お世話になった人たちに感謝しながら、これからの人生を歩んでいきます。」と話しました。全てがすんなりと予定通りに進まなかつたからこそ、今の成長した私たちがあり、しっかりとした気持ちで治療へ臨めると思えます。あのときの私たちではダメだったんです。すんなりいかなかったことが夫婦や家族の絆や信頼となり、今の私たちになれたんだと思います。主人の言葉通り、これからもお世話になった方々に感謝して、頑張つて治療に通いたいと思えました。(2015・3現在治療中)



ひさん(夫)

初めての面談の時、相談室で「無精子症の辛さがお前になんかわかるもんか。覚悟ができていないなんてふざけるな」とぶち切れてから1年9カ月。それは私たち夫婦が父からの精子提供を受けて親になる心の準備のために絶対に必要な時間だった。

「どうしても子どもが欲しい。私たち夫婦はこの方法でも子どもを幸せにできます。」

諏訪マタニティークリニックで父からの精子提供で治療を受けたいと考え、初めての面談を受けに行く時そういう思いでいました。そして全ての面談を終えた今もまったく同じ気持ちです。がしかし、そう考えるまでの過程というか考える根拠が初めに思っていたものとは2人して大きく変わりました。

治療についての問い合わせをした後、諏訪マタニティークリニックさんから「皆さん方と私たち施設との互いの信頼関係ができてから治療に入っ

ていきます。まずは四人揃ってしっかりと話し合った上で面談に臨んで下さい」というメールをいただきました。私の父は単身赴任していたため母を通してしか父の了解を得ていなかったのですが、父は承諾してくれていることがわかっていたので「夫婦二人での面談は2回あるから1回目が終わったらその報告も兼ねて四人で話そう」と思い「両親と四人で話し合い精子提供について快諾してもらおうことができました」と返信を出しました。

すこし不安を持ちながらも、正直簡単な顔合わせ程度であると思って迎えた1回目の面談。「これまでの不妊治療中はどんな気持ちでしたか?」「無精子症とわかった時はどんな気持ちでしたか?」など、これまで私たちがどんな思いをしてきたかについて多く質問され、これまでの治療施設では気持ちについて触れられることは全くなかったのです。ここまで聞いてくれるのかと少しうれしい気持ちもありました。が、しかしこの後事件が起きました。「四人でお話しした時のことを教えてください」との質問に私は正直に「していません」と答えました。「メールには四人での話ができている、と返信をいただいていますか?」ということでしょう。私は頭が真っ白になりなが

らも、こちら側の事情説明のない訳がましいことを言ってしまうました。それに対して渡辺さんから「この面談を甘く考えてもらっては困ります。あなた方はこの治療を受けていく覚悟ができていない。最初からこんなことではこの先には進めません」ときっぱりと言いつつ、私は悔しさの余りにとつさに「無精子症の辛さがお前になんかわかるもんか。覚悟ができていないなんてふざけるな」とぶち切れてしまいました。言ってしまったすぐに「ああ、どうしよう、もうおしまいだ。」そう心の中で思いながら、とりあえず妻と二人で話してくださいと案内された隣室へ移動しました。し

てこなければならぬことをしてこなかった私たちが悪い。きちんと四人で話をしてもう一度面談をしてもらえないかお願いしよう。そう妻に諫められ、私はうなだれたまま再度相談室へ戻りました。

普段感情をあらわにするような性格ではないので、自分がしてしまった事の大きさにすっかり落ち込んで顔も上げられないままの私に、渡辺さんはまず「あんな風にご自分の正直な気持ちをあなたが口に出れて良かったです」と言われました。それに続いて「お父さんと直接話しをしていないというこ

とは、あなたの中にまだ精子の提供を受けて子どもを持って父親になるという覚悟ができていないからだと思ふのですが違いますか? 諏訪マタニティークリニックでしかできない治療だと頼って来られる方々全員にこの治療を受けていただきたいと思いますからこそ、この面談期間を通してしっかり考え、学んでいただくべきことをこちらもお伝えさせていたいただいているんです。Yさんのお宅は、もう一度第1回目の面談としての日程調整をしますので両親共々しっかりと話し合いをして出直してください。待っていますからね」と言っていたとき、ここまで私たち夫婦の「気持ち」を汲み取ってくれる、そんな病院に巡り合えたことに感動と感謝でいっぱいです。路につきました。

今になればあの時はまだまだ非配偶者間体外受精について何もわかっていなかったと思います。自分の可能性にかけて行っていたそれまでの不妊治療と、父親の精子を提供してもらったおこなう不妊治療とは意味が全然変わってきます。純粹に2人の子であるのと父親の精子を使って生まれた子とは、起こりうる問題はぜんぜん違ってくるということをぜんぜんわかっていませんでした。妻が産める、血が繋

がるというハッピーな結果ではなく、その子の幸せを本気で守り抜く覚悟をもった親になれるか、その過程がいかに大事かということを私は甘く考えていたことに気づけました。そして、それを全て渡辺さんはお見通しだったのだと思います。

帰ってからすぐに面談で起こったことすべて両親に話しました。考えてみると、無精子症と分かった時もその後精子細胞を使つての治療がうまくいかなかった時も不妊治療について四人で話をしたのはこの時が初めてでした。父からは「もちろん力になれるのなら力になる。今回の面談は仕方なかったが次の面談はしっかりやってこい」と言ってもらいました。母からは「きちんと話してくれて嬉しい」と言ってもらいました。これまで妻と二人で抱えてきた不安も、これからは両親にも直接話して聞いてもらおう、何でも話してみようと思え、四人で話すことにまさかそんな効果があるなんて思ってもいなかったのです。だから四人で話してからでないのだめなのだ、まずは四人で本当の家族になることが大切なのだということ、ここで気づくことができました。

それからほどなくしてテレビで根津院長がこの治療のことについて公表さ

れ、それについて世間では非配偶者間体外受精について多くのバッシングが出ていました。私たち夫婦もその様子をインターネット等で読んでいましたが、あんな批判などは私たちには全くどうでも良いことと思ってみていました。当事者にならなければ私たちの気持ちにはわかりません。私たちだっで、そうなるのはじめてわかったのです。だから、その当事者の気持ちが変わらない人たちがこの治療についてどう言おうと、それはまったく関係ないことなのです。人間は人の欠点を指摘するのがとても得意な生き物ですから今回のことも少し異質なことをしている人になにか言いたいだけなのだと思います。大切なことは、私たちがそんな周囲の目にまどわされたくないということ。愛する人との間の子どもが欲しい、その子どもを家族で大切に育てていきたいという純粋な気持ちをブレずに持ち続けていくこと。そんな気持ちを妻と再確認することもできました。そして面談の行程にあった課題の6冊も同時期に読んでいたので、諏訪マタニティークリニックにおける特殊生殖医療に関する実情を学ばせていただき、この時代、この時期に諏訪マタニティークリニックという施設と巡り会えたことの運命に感謝しました。

その後、やり直し面談を含めて3回の面談が終わり、今は治療の開始を待つばかりとなりました。最初の問い合わせから最終面談までなんと1年9カ月の年月を費やしたわけですが、その期間私たち夫婦は本当にたくさんのことを考え、話し、感じ合ってきました。「親になるための心の準備」をしっかりとさせていたのだと思っています。そして、生まれてくる子どもの幸せのためのことはもちろん、「生殖障害者である私たち夫婦のこころ」も救っていただけた時間であったと思っています。最初は、自分自身の身の上について不妊治療をしなければ子どもができないなんて不幸だ、どうして自分がとも思っていました。でもこの1年9カ月の間で、私たちは決して不幸なわけではないのだから生まれてくる子どもも不幸にはならない。こんな思いに至りました。根津院長が面談の時「あなた方夫婦なら乗り越えられるはずと神様がくださった試練だと思つて、これからも進んでいってほしい」と言われた言葉の通り、治療とこの先の人生を家族とともに力強く進んでいきたいと思えます。(2015・3現在治療中)



非配偶者間体外受精(卵子提供)



卵子

ひさん(妻)

クールな吉川先生が少し笑いながら「妊娠してるよ」と言ってくれた時は一瞬訳が分からず信じられなくて、でも本当にうれしくて主人と人目をはばからず泣いてしまいました

私は小学生の頃に病気をし、その際の放射線治療の影響で子どもが望めない身体になりました。子どもが出来ないと解かっていて結婚してくれる人はいないだろうと正直結婚自体を諦めていました。それでも主人は私の身体の

事を理解し、受け入れたうえで結婚してくれました。

結婚して子どもが欲しいと思うのは当たり前の事で、ほんのわずかな望みをかけ不妊治療の病院に通いました。

その病院の医師に告げられた言葉は今でも傷が癒えない程ショックなものでした。いくつかの検査をし、その採血の結果の値がもう閉経したおばあちゃん程の数値だったらしく、それでも何か治療法や出来る事はないのか尋ねると、「もう閉経したおばあちゃんに子どもが欲しいと言われても無理な話。あなたは考えが甘すぎる。うちで出来る事は何も無い。」ときっぱり断られました。

当時20代だった私にとってその言葉はあまりにも残酷でくやくして…、一人車の中で泣きました。

なぜそんな言い方をするのだろうか。と、ただただ絶望感と不信感だけが残った事を覚えています。

自分の中に卵子の生存は確認出来ず、私に残された道は卵子提供のみ。でも、実際にそれを受け入れてくれる病院はなく、それでもどうしても諦める事が出来ず、いろいろ調べているうちに諏訪マタニティークリニックの事を知りました。正直、前の事もありとても怖かったのですが、最後の望みをかけ病院にメールをしました。

幸運な事に私は周りの環境にはとても恵まれていて、自分に出来る事なら何でもすると言ってくれる主人、提供のお願いを受けてくれた姉、全てを支えてくれた両親の存在が本当に有難かったです。でも、私たちの壁は距離でした。私も姉も別々に遠く離れた場所に住み、ましてや姉がシングルマザーという事もあり一人で働ながら家事や子育てをしていた為、なかなか仕事を休むのが難しいという事。最初の電話の際、渡辺さんにも姉の通院について心配していただきましたが、とりあえず一緒に考えるので相談においてくださいと言っていただけ、

私たちに病院に行く機会を作っていただきました。初めて諏訪マタニティークリニックを訪れた時は本当に緊張でいっぱいでしたが、渡辺さんに会い、丁寧な説明を受けた。丁寧にこれからの事や治療内容を説明して頂き、可能性はあると言ってくれた時、今まで絶望の中にいた私は本当に救われた気持ちになりました。そしてここしかない！ここを私たちの最後の砦にしたいと思えました。初めての面談では心配でついてきた父に対して嫌な顔一つせず、丁寧な説明をして不安を取り除いてくださいました。本当に有難かったです。

根津院長先生との面談では、本などを読んで私が想像していた通りの方で、やさしく「病気になったのはあなたじゃないよ、自分を責める事は無い」と言ってくれ、その温かい言葉に涙があふれました。無事に最終面談を終え、この時私たちの誰もがすぐに治療に入れると思っていました。しかし、妊娠するために絶対に必要な子宮内膜が私は薬を使っても全く厚くならず、この状態では治療に進む事が出来ないかもしれないと言われた時は本当にショックでまさかここまでできて私の子宮が原因で治療自体が出来ないなんて考えてもいなかったのか正直主人や姉に何と伝えたらよいのか

卵子

Gさん(妻)

これまでどんなに辛くてもほとんど泣いた事のない強い私が入前でも泣いたり、面談を重ねていくうちに気持ちに変化がありました。提供者からも「これから一人で悩まないでね」という言葉をもらい心強い援軍がいることに気づいて心から感謝しました。

若い時から子宮内膜症に悩まされ、主治医の説得もあり20代半ばで両卵巢の手術を受けました。主治医から「悪いところは取ったから将来妊娠できるよ。今は体外受精があるしね」と言われ、ぼんやり「体外受精をすれば子どもは授かる事ができる」と考えていました。30歳を過ぎ、結婚してすぐに不妊治療を始めました。

子どもが欲しい一心で主治医の指示通り体外受精を続けましたが一向に妊娠することはありませんでした。それどころか採卵すら出来ない状態で内膜症の手術を繰り返すことになりました。内診時のエコー画面には卵胞が映る事は無く、何百回もみる残念な画面はポディブローのように心身共に私を

分かりませんでした。

不安で不安で渡辺さんにメールをしたり、看護師の小林さんに何度も電話をしてしまいました。きつと私は手のかかる患者だったと思います。それでも「それで気持ち少しでも楽になるのならいつでも連絡してくれていいから」と言ってくれださり、すごく救われました。子宮鏡検査や薬などを使い、吉川先生が本当に本当に一生懸命に診て下さって、皆さんの協力のお陰でなんとか治療が出来る事になりました。姉の身体の事や生活の事を考え、私たちの間では治療はワンチャンスと決めていました。採卵から戻って眠っている姉をみて本当に有難く涙が出ました。順調に受精、分割し、無事私の子宮に戻すことが出来ました。

吉川先生が受精卵を見せ私の子宮に卵を戻した時、いろんな想いが込み上げてきました。やっとここまで来たんだ。信じられない想いと、でも今まぎれもなく私のお腹の中に卵がいるんだ。少しだけ妊婦さん気分になりました。判定日までの毎日は気が気ではありませんでした。今までの事もあり、普通でも難しい事がもつと妊娠の可能性が低くなってしまったのではないかと、ましてやワンチャンスというプレッシャー。いけないと解かっていて

もネガティブな事ばかりを考えてしまいます。それでも毎日「絶対に幸せにするから、安心して私たちのもとに逢いに来て」とお腹に話しかけ、いよいよ判定日。私も主人も緊張しながら診察室に入りました。

いつもクールな吉川先生が少し笑いながら「Uさん、妊娠してるよ」と言ってくれた時は、一瞬訳が分からず信じられなくて、でも本当にうれしくて主人と人目をはばからず泣いてしまいました。皆さんも心から喜んでくれて、私たち患者の為に一緒に喜び泣いてくれる、本当に誼訪マタニティークリニックに出会えて良かったと思いました。

それから順調に成長し、誼訪マタニティークリニックを卒業の日。その日も根津院長先生は私たちの為に会いに来てくれて、心から喜び一緒に泣いてくださいました。

もし院長先生がまわりからひどいバッシングを受けてもこのように公にしてくれていなければ今の私たちはいなかったでしょう。本当に自分の事ではなく、患者さんの事を一番に考えてくれている方なのだと思います。

でも、その事をなかなか受け入れてくれないのが今の現実です。自分の力ではどうする事も出来ないけど、もし

方法があるのならどんな事でも挑戦したいと思う事はそんなにいけない事なのでしょうか？まわりの人から見れば、そこまでしなくても…とか、産まれてくる子どもの事をきちんと考えているのか、など良く思わない人も多いと思います。そんな事は私たち自身が一番よく分かっています。誰よりも悩み苦しみ、いろんな葛藤がある中で、それでも産まれてくる子どもを絶対に幸せにするという責任と愛情を持って決断した結果だという事を多くの方に理解して頂けたらと願います。

そしてこれから先、私のように悩む方の為に誼訪マタニティークリニックのような病院が少しでも増え、治療がしやすい環境になる事を願わずにはいられません。

ここまで協力してくださった皆様には心から感謝の気持ちでいっぱいです。そして私は今、妊娠6カ月目に入りました。正直、今でも信じられず、夢なのではないかと思う事もあります。が、元気に動き、力強くお腹を蹴ってくる、この事はまぎれもなく現実でただただ愛おしく感じる毎日です。心配事は尽きませんが、今はただこの子が無事に産まれる事を願うこの原稿を書いていきます。(2015.3現在第1子生後6カ月)

疲れさせました。それでも何周期も何年も卵胞が出てくることを夢見て治療を続けましたが私の卵巣から卵子が採れ妊娠することはありませんでした。原因は若い時に受けた卵巣の手術だろうと言われました。卵巣にメスを入れることが必ずしも不妊につながるとは限らないと思いますが、私に限っては致命的な手術となってしまったことを知り、自分の置かれていた状況が治療を開始した時点で既に崖っぷち、どころかも望みが無いことに気づき、受け入れるのにとっても時間がかかってしまいました。

インターネットで何か方法は無いかと検索していた際に諏訪マタニティクリニックの特殊生殖医療(卵子提供)のページにたどり着き、私たち夫婦は私の卵子での治療から違う選択肢を話し合いました。夫と二人で考え抜いた末、卵子提供に切り替えて治療を続けようとして決意しました。

クリニックに問い合わせをさせていただき、カウンセラーの渡辺さんから一通り説明を受けた後は「やっぱり無理かな」と弱気になって帰路についていることをよく覚えています。不安を抱えながらすぐに提供者へお願いに行きました。提供者は私の親族です。いつもそで私たちの不妊治療を家族総出で

応援してくれました。卵子提供は提供者にとってはボランテアであり、身体的苦勞を伴うデメリットばかりでハードルの高いことだと私は考えていましたが、不安でいっぱい私をよそに彼女は笑顔で提供してくれると言ってくれました。

面談では、これまで胸の奥に秘めていた悲しかった気持ちや人生観など思っていることを全て素直に吐露させていただきました。何度目かの面談で「今後何かあった時には一緒に考えますから」と渡辺さんが言ってくださいました。私はこの時ハッとしました。

これまで夫と二人だけで思い悩んできましたがこの言葉が強力な一言になりました。初めて肩の荷が下りた気がしました。これまでどんなに辛くてもほとんど泣いた事のない強い私が人前で泣いていました。それくらい面談を重ねていくうちに私の中で気持ちに変化がありました。提供者からも「これからは一人で悩まないでね」という言葉を、提供者の夫からも「始める前は通院にも不安があったけど、行動しちゃうと案外乗り越えられるものだね」という言葉をもらい、心強い援軍がいることに気づきました。本当に困って声をあげたら一緒に助けてくれる人がいたのです。なんとという有り難いこと。

そして気持ちの整理がつき心穏やかに治療に進むことが出来ました。

私たちが幸運だったことは、まず日本で卵子提供を実施してくれるクリニックに出会えたこと。100%信頼できる先生に治療していただけたこと。吉川先生の誠実なお人柄と最高の技術は患者への最高のプレゼントだと思います。さらに卵子を提供し、治療に協力してくれる親族がいたこと。私は提供者には採卵を終えた時点で何の義務もなければ責任もない代わりに、何の権利もないということを重々理解してほしいと考えていました。そのような提供者を現在の日本では自分で探すことは容易なことではありません。それが身近にいてくれて、提供者の家族も総出で協力してくれた事はこれまでの人生最大の幸運だったと思います。

初めての採卵で凍結卵が2個でき、幸運な事に1回目の移植で妊娠することが出来ました。数値も良く、胎嚢も心拍も順調に確認できました。奇跡が起きた！と皆で大喜びしました。10年には満たない私たちの不妊治療歴ですが、治療費の面からも解放される安堵感もあり、初めての妊娠はふわふわ浮いているような幸せな気持ちでいっぱいでした。しかし現実はそのように甘

いものではありませんでした。流産は想定範囲内とはいえ、診察後、夫と渡辺さんの胸を借り大泣きました。大泣きしましたが、なぜか気持ちは前向きでした。その時はまだ凍結卵があるから次の移植への希望があったからです。希望があるだけで頑張れる、「希望」がどれほど大切か身にしみて分かりました。

気持ちを新たに臨んだ2回目の移植は残念ながら着床すらしてくれませんでした。卵子提供にチャレンジしても子どもを産めないのか、何十回悲しい思いをして何十回這い上がればママになれるのかと、今は途方に暮れて下ばかり見てしまいます。それでも人生は続きます。これからどうするか夫と話し合い、これからは二人で支えあいがらまた次の歩を踏み出せるように頑張りたいと思います。(2015.3 現在治療中)



面談に関わる 相談室スタッフの思い

不妊外来に併設する形でこのとり相談室が開設されたのが2003年、当初は一般不妊治療の方のころのよりどころとして医療者による治療相談とカウンセラーのカウンセリングにて相談業務をおこなっていましたが、特殊生殖医療に関してのご相談が年々増えていったため、2007年頃からそちらの皆さん方のサポートもさせていただくようになりまして。当初面談はカウンセラーが1人でおこなっていて、当院に来られるまでの治療経緯や気持ちの話をお聴きし、それを院長に上申するよう形でおこなっていました。しかしその場での嬉しい話に感動する時、またその逆に返答や判断に戸惑う時に、「ああ、誰かここにいてくれたら」と思う事があり、さらに「私の常識や感覚がズレていたら大変」という不安を常にかけていたため、先生方と相談し、日常の相談室での相談業務に携わっている培養士と外来看護師にも面談に同席してもらうようになりここで2年が経過しました。立場や価値観、考え方の違うスタッフが面談に関われる事は、患者さんの見方の偏りが無くなり、また感想をシェアすることができて大変心強く、面談も充実するようになりまして。これまでのTOSSには面談に関わっているスタッフが登場したことがありませんでしたので今回はスタッフが日々感じていることをお伝えしようと思えます。(渡辺)

保科 「培養室主任培養士・勤続18年」

これまでの相談室業務は、培養士として患

者さんからの治療に関する質問に答えることだったので、どうして患者さんが子どもを欲しいのか、どういう経緯でここに来られたかという、治療にあたっての事情や気持ちなどを深く知る機会がなかったのですが、それを面談の場で知ることができるようになって、以前にも増して卵子や精子に愛着が湧き「大切にしなければ」という気持ちが一層強くなりました。面談の場では1回目の面談の時と比べ、最後の面談で患者さん方の顔つきが変わってくるのがとても不思議です。回を重ねるごとに明らかに家族の繋がりが強く深くなっていくのです。それがすごいことだといつも思います。あるご家族の最終面談の際、ご主人が「これから治療をしようよな結果が出なくとも、これに取り組んだことで家族の絆が強くなったことには間違いないので、それはそれでとても良かったです」とおっしゃった方がいて素晴らしいと感動しました。治療に入ってから私の本領発揮の場ですので、皆さんのお力になれるように今後とも頑張っていきたいと思えます。

小林 「不妊外来主任看護師・勤続10年」

特殊生殖医療に関わる前はこうしてそこまですて子どもが欲しいのか?と思ったこともありませんが、面談の場でじっくり皆さんに話を聴かせてもらう内に、「家族の協力を得て何としてでも子どもが欲しい、この人の子だから欲しい、この人と育てたい」という強い気持ちやご夫婦の絆を感じて、それまでの自分の考え方がとてもはずかしく思えたというのが正直なところです。私自身、この面談に関わらせていただいてから、看護師として患者さんとの関わり方が変わってきたと思

います。治療を一回限りと決めて卵子提供の治療を始めた方と関わらせていただいた時のこと。1回というチャンスはどうすれば確実に悔いなく行えるか、何度も何度も話しました。そしてその1回で見事妊娠が叶った時、その方とご主人と3人で大号泣してしまいました。赤ちゃんが産まれて会いに来てくれた時もまるで身内のような気持ちで嬉しく再会しました。ああいう経験は今までにはなかったのです。そして、また現場におけるカウンセリングの大切さもこの面談に携わるようになって痛感しています。1回目の面談で、ご主人(無精子症のご本人)さんが、今までどこにも泣くところがなかったと泣かれる方が多くいらっやうして最初とても驚きました。けれどもその後は、明らかに表情が明るくなるんです。話すことによってご自身の気持ちに確実に整理が出来て、ぐんと一歩前に踏み出せていると感じる場面を多く見てきて、カウンセリングは特殊生殖の治療を始めににあたっては絶対必要なことだと痛感しています。特殊というくりがなくて、日本中どこでも、オープンで、当たり前治療としてできるようなれたら、苦しんでいる人達にもっと救えると思います。それにつけてもしっかりとしたメンタルサポートなくしては取り組んではいけない部門であるということだけはハッキリ感じています。そういう意味でも私自身、カウンセリングスキルをもっともっと磨かなければと思っています。

入倉 「不妊外来副主任看護師・勤続7年」

私は今、面談に同席し始めた段階なのですが、治療に入る前のお気持ちを診察室でお聞きすることはなかったので、ひとつひとつの

面談がとても勉強になっています。自身の生き方、夫婦とは何かを顧みる機会としても貴重な経験をさせていただいていますが、皆さんの人生が変わっていく場面も多分にあるので、大切な場所に居させてもらっていることを痛感しますし、また責任も重いと感じ身が引き締ります。特殊生殖医療を希望される方がお子さんを望むことをエゴだと言われたというお話を聞いて、ん?と思っただけです。昔は不治の病と言われていたものも医療技術が進んだ現代では治ることがある。見方によってはそういうことだってエゴとも言えないかな?と。ただ病気が違うだけの気がします。法整備も進んで、早くこの施設でもきちんと対応できるように願っています。私自身としては聴ける力をもっとつけて患者さんに寄り添っていきたいと思えます。

渡辺 「相談室主任カウンセラー・勤続24年」

患者さんとの出会いで全てを学んできた私達。そこで出できた問題や課題を常に話し合い、考えて、より良い形をと皆で模索して変化させてきたこれまででした。今後は、ここで皆とやってきたことを広く社会に向けていきたいと思います。私達の経験での良かったこと、悪かったことをたたき台にしていただき、どんどんシェアし、意見を出し合い、そんな場作りを全国各地でもしていけたらと。患者さんのためにと思って、日夜努力奮闘している施設は沢山あります。気持ち力は私達施設と同じはずなので。もちろん、目の前の患者さんのお役に立てる私達であり続けるのは大前提です。これからもスタッフ一同努力研鑽して参りたいと思えますのでどうぞよろしくお願ひします。